

＜先週の説教から＞

『黙示録④一神の聖水を入れた鉢』

民数記 5:16～28 ヨハネの黙示録 16:1～11

先週の説教では、15章の2～4節には、天のガラスの海を渡って、神様がおられるみ国へと向かう救われた者たちの様子が喜びを持って書かれていました。彼らは地上の歩みに於いて「獣に勝ち、その像に勝ち、またその名の数字に勝った者たち」でした。それ故、神様は彼らにこの世から天のみ国へと進む「道」をちゃんと備えてくださったのです。それが「ガラスの海」でした。もはや嵐に翻弄される苦しみも洪水に流される心配もない、安心して向こう岸に着けるように、渡るべき天の海をガラス化して、その上に道を付けて下さったのです。それはあたかもモーセに率いられたイスラエルの民が紅海(=葦の海)の中に道を付けられたように。彼らは神様のおられる対岸にいて「豎琴を手にして」「神の僕モーセの歌と小羊の歌」を声高らかに歌っていたのです。まさに《永遠の命》を与えられた喜びを讃美していたのです。

ただ、上記の出来事の素晴らしさを語ることに終始し、残りの5～8節を語らないままでした。黙示録は前後の関係性がとても大事ですので、本日は15章5節から始めさせて頂きます。即ち「この後、わたしが見ていると、天にある証しの幕屋の神殿が開かれた。そして、この神殿から、七つの災いを携えた七人の天使が出て来た。」です。ここで「この後」と訳されている言葉は「これらのことがあった後で」という意味で、救われた者たちがひとり残らず確実にガラスの海を渡り切った後に、それを確認したことを合図に天の神殿が開かれたのです。「証しの幕屋」とは、イスラエルの民が荒野を40年間旅した間、モーセが神様のご意志を聞くために建てた移動式の聖所でした。そこに神様が自らを「証された」のです。後に、民が定住するとエルサレム神殿として固定されたのです。まさに神様のおられる場所でした。そこが「開かれた」ということは、誰かが外から開いたのではなく、神様ご自身が中から扉を「開かれた」ということを表しています。そして、7人の天使を地上へとお遣わしになったのです。しかも「七つの災いを携えた」天使たちを。ここから《最後の七つの災い=最後の裁き》が始まるのです。言い換えれば、救われる者が一人も漏れることなく天のみ国へ招き入れられてこそ、最後の終末の裁きは開始されることを表しています！

これまで地上への災いを伴うものとして、黙示録は《7つの封印》と《7つのラッパ》とがあることを預言して来

ました。しかしそれらはあくまで《警告=悔い改めさせるための災い》でした。なぜなら、前者は全地の「四分の一」が、後者は「三分の一」が災いに遭うとされていたからです。残りの四分の三や三分の二がそれらの災いを通して、神様に立ち帰ることを望まれていたものでした。そこにはまだ神様の期待と忍耐が存在していたのです。

しかし、今回の天使が手に渡されるものは「神の怒りが盛られた七つの金の鉢」でした。16章に入って1節に「行って、神の怒りを地上に注ぎなさい」と天使たちに命じられています。この《7つの鉢の災い》は警告ではなく、神様の猶予や忍耐もなく、地上全体に対する完全な裁きを実行するものなのです。まさに《最後の裁き》なのです！

この「鉢」というのは、旧約聖書で神殿の中に用意されている聖水を溜めておく容器のことです。大祭司が身を清めたり、儀式に用いる器具を聖別したり、時には神様の判断を知るために人が飲んだりするものでした。本日の民数記の箇所には、この聖水が受けて飲む側の人間によって、罪がなければ清められ、罪を犯していれば神様の裁きを受けることになったのです。これから、7つの鉢の水が「注がれる」ことで災いがその者達の上にかかるということは、彼らが《罪を犯している》という証拠なのです。

最初の鉢が地上に注がれると「獣の刻印を押されている人間たち、また、獣の像を礼拝する者たちに悪性のはれ物」ができたのです。先程の救われた者たちは獣や像を拒んだ故に救われ、そうでない人たちが有罪とされると。

二番目の鉢は「海」に注がれました。その結果「海は死人の血のようになって、その中の生き物はすべて死んでしまった」のです。なぜ、海なのか？ それは上記の「獣」が「海の中から上って来た」(13章1節)からでした。聖書では、海は混沌(=カオス)であり、海の底には得体の知れない、神様に逆らう怪物(=レビヤタン等)がいると考えられていたのです。先程の「ガラスの海」も、もはや混沌が凌駕され、何も出て来ないことを表しているのです。

いずれにしろ、この2つの裁きとも、各々が行った振舞いの責任がちゃんと問われていることが分かります。サタンの化身である「獣」の存在やその活動を結果的に許してしまった罪が正しく裁かれるのです。知らなかったとか、だまされただけだとか、そのような言い訳は通じない。見て見ぬ振りをした罪までちゃんと問われるのです。それが《最後の審判》なのだと言われているのです。私たちは、この審判を前にした時、とても自分だけでは生き抜けないと感じます。キリストによる赦しがどうしても必要です！

No. 62-9

週報

2020年度 教会標語

「生活の真ん中に礼拝する心を！」

2021年 2月28日

日本キリスト教団 上尾合同教会
牧師 武田 真治

〒362-0041 上尾市富士見2-3-33

TEL&FAX 048-771-6549

<http://www.ageo-church.org/>